



美ヶ原に近い山の中で鳥の声を聞きながら自分の音に耳を澄ます……（小学校5年生の頃）

山に囲まれた安曇野で

音を磨いた日々……

アルタスフルート田中社長（元）との出会いから響きへの
挑戦が始まった。

高校時代に安曇野に工場があるアルタスフルートの創業者・田中修一氏と出会い、
実家のある松本市から自転車で行くまでレッスンに通いながら、ひたすら理想の響きを
追い求めた中條さん。時に山や森に向かい、鳥の鳴き声に耳を傾けながら吹いた経験も
自身の音づくりの原点の一つになったという。

記事協賛：株式会社グローバル

山に向かって吹くと自分
が小さな存在になったと
感じるけれど……

当時、僕は音程などに悩みを抱えていたんですが、田中社長がその時に貸して下さったアルタスの頭部管で吹いてみたら、そうした問題が全部消えてしまったんです。14金という少し特殊な頭部管だ

——松本市の浅間温泉ご出身といえ、今使っているアルタスフルートの田中修一社長（元）と同郷ですね。
中條 そうなんです。東京藝大附属高校を受験して落ちてしまい、ガックリしていたときに松本で行われたウイリアム・ベネットの公開レッスンを受け、そこで田中社長とお会いしました。以来、安曇野のすぐ近くにあるアルタスフルートの工場に行き、オルドの楽器などいろいろなフルートを吹かせて頂いたり、ピッチやバランスの問題などいろいろなアドバイスを頂くようになりました。

2歳から口笛を吹き始め、
4歳で「空き瓶奏者」をめざす



——白樺を背に岩の上で吹いてらっしゃるこの写真（別掲）は何才の頃ののもの？
中條 小学5年生、10歳のときです。実家（松本市の浅間温泉）の裏の道を上っていくと美ヶ原高原に出るので、その山の上で木工をやっている知り合いのおじさんが音楽好きで、その庭でよく吹かせてもらっていました。
山に向かって吹くと全然響かなくて、自分が小さな存在になったような感じがする。でも達成感みたいなものが得られるんです。目の前にも山があり、自分の音が微かに届いて返ってくるんですが、鳥の鳴き声には敵わないんですね。カッコウなんか低いトーンなのでよく響いて、羨ましいなあ。

その頃から響きをつくることには興味がありました。実家の向かいも山で、窓を開けて練習しているとウグイスが鳴く。負けてたまると良い音で返したりすると、鳴き声が変わるんですよ。本当です（笑）。田舎に育って良かったと今でも思います。

中條秀記

◎群馬交響楽団首席フルート奏者

H i d e k i N a k a j o

PROFILE

長野県松本市出身。
9才よりフルートを始め、1999年に桐朋学園大学卒業。桐朋オーケストラアカデミーに学び、2000年にドイツのフライブルク国立音楽大学に留学。フルートをロバート・エイトケン氏に師事。在学中、NTTドコモの奨学金を受け、2002年に同大学を首席で卒業。1999年に水戸室内管弦楽団、2006年及び2008年にサイトウ・キネン・フェスティバルin松本に参加。日本ではフルートを三上明子、岩佐和弘、峰岸壮一の各氏に師事。ジェームズ・ゴールウェイ、工藤重典、ウィリアム・ベネット各氏のマスタークラスに参加。2006年に群馬交響楽団に第一フルート奏者として入団。現在同団首席フルート奏者。高崎経済大学附属高校非常勤講師。

ったこともあり、以来、楽器の響かせ方などの手ほどきを受けるようになりました。音の処理の仕方などの目に見えない部分、感覚的な部分も田中さんは論理的に教えて下さった。高校時代はそうやってずっとレッスンして頂いたようなものです。

——田中さんがベネットと一緒にフルートのスケールの改良に取り組まれたことはよく知られていますね。

中條 アルタスのスケール感には高校生だった自分にもとてもしっくりきました。慣れるのはもちろん大変でしたけど、吹いていて心地よいスケール感なんです。

——どんな心地良さ？

中條 音が最も美しく響くポイント、それがイコール、最も音程が良いポイントだということ。アルタスだと、きれいな音が出るポイントを探し、そのポイントで吹いていくとスケール（音程）がきれいに整う。それがすごく心地よい。

余談ですけど、僕は2歳の時から口笛を吹き始め、4歳くらいから空き瓶を吹くのにハマったんです。「空き瓶奏者」になりたいと思っただけ。「そんなのないよ」と言われましたけど（笑）。

とにかく空き瓶なら何でもめっちゃくちゃいい音で鳴らすことにこだわりを持っていたので、瓶が一番いい音で鳴った時の手に伝わってくる共振の感覚を早くから知っていました。ところが、それまで使っていた楽器でそのポイントを探すと、必ず音程がはずってしまうんですよ。ピアノと

右小指を押さえている
のなら左手の小指も押さ
えて楽器全体の響きを感
じていたい……

合わせてもスケール感に違和感を感じ、それがすごくフラストレーションになっていた。アルタスだとそれがきれいに聞こえるんです。それで大学を受験する前に楽器をアルタスに変えたんです。

オーブンの響きの良さを信じて



——オーブンのアルタスを使っているらしいんですけど最初から？

中條 いえ、オーブンのアルタスに変えたのは大学（桐朋学園大）に入ってからです。合格してすぐ師匠の峰岸（壮二）先生に「オーブンの響きを変えてみたい」と相談したら、理解のある先生で「やってみたいんじゃないか」と言ってくれました。

——なぜ突然オーブンのアルタスに？

中條 通常の運指だと左手の小指をほぼ常に上げていないといけないことにすごく違和感を感じたんです。指は全部押さえていたい、指で響きを感じていたい。フルートでは右手の小指も押さえているのだから、左手の小指も押さえてほしい。……と

——そのリスクを覚悟で変えられたんでしょう？

中條 ええ。フルートを割と早く9歳から始めたので、大学に入ったらか新しいことに挑戦してみたいと思っていました。（オーブンの楽器を使う）ベネットさんのあの音色がすごく気になったし、田中社長も「オーブンの響きがいいよ」とおっしゃって

いたので。

確かに、慣れてくるに従って音色以外のオーブンの良さがどんどん分かってきました。どの音も飛んで行ってくれるというか、響きにバラツキがない。キーが1個少ないだけで管が響きやすくなるのか、自然な息で楽器が楽に響いてくれるんです。それで、「いつか元に戻すことになるんじゃないか」という思いを吹っ切り、「もうこの楽器です」と行こう！と。

面白かったのは、大学を卒業してフライブルク音大に留学しましたが、そこで師事したロバート・エイトケン先生が「ヒデキの音がいいのはオーブンの響きだからなのか」と言ってくれて、ご自身もオーブンの楽器を買われたこと

——なぜエイトケン氏に習おうと？

中條 エイトケン先生が日本でコンサートをを行った時にピアノの譜めくりを手伝い、今まで聴いたこともないような自然で柔らかく包み込むような音を間近に聴いて「習ってみたい」と思った。それで翌年夏にギリシャで行われた先生の講習会に行ったら「来たかどうかだ」といわれ、フライブルクに行くことになったんです

が、これもきっかけ

は田中社長がつくってくれました。——エイトケン氏もアルタス奏者ですか？

中條 そうです。巻き管のアルタスです。——現代音楽のスペシャリストですね。

中條 フライブルクでも日本人の作品をたくさん練習し、おかげで日本のフルート作品の良さを知りました。先生は現代作品だけでなくバロック奏法にも詳しく、学者肌のオールマイティな方です。現代奏法やバロック奏法で使うタンギングなどもた



フライブルク国立音大で師事したロバート・エイトケン氏と右端はアルタスフルートの田中修一社長（当時）。



2020年12月、高崎芸術劇場で行われたコンサートでモーツァルト「アンダンテ」のソロを吹く中條さん。指揮は小林研一郎氏。(写真は群馬交響楽団提供)

まっていたものが一気に噴き上がったみたいところがありません。そして、そのとき初めて、「自分はフルートが大好きなんだ、自分にはこれしかないんだ」という確信を持つことが出来た。演奏家として生きる自分が、あの時に確立されたと思っています。それからはコンクールなども受け身ではなく自発的に受けるようになり、成績も伴うようになりました。

そんなとき、群響にいた知り合いが僕をエキストラに呼んでくれたんです。第1フルート奏者を募集している時期でした。群響の雰囲気がちやくちやいいのをその時に知りました。安曇野で育った人間なので都会はあまり得意ではなく、緑も山もあるという群響の環境が大好きになって「ここで吹きたい、ここに住みたい!」と。

——今はお住まいも高崎ですか？

中條 高崎です。群馬に骨を埋めます(笑)。

くさん教わりました。教え方も上手で、いつも理詰めで分かりやすく教えてくれます。

このオケに入りたい!
この街に住みたい!

——群馬交響楽団に入られたのは、帰国後しばらくしてから?

中條 2006年です。実はそれまでに僕は大きなスランプを経験しています。ドイツにいた時にひどい椎間板ヘルニアと盲腸炎を患い、異国の慣れない生活環境も重なって精神的にも参ってしまったんです。がむしやりに頑張ってきたツケが回ったんでしようね。日本に帰ってからも楽器が吹けなくなってしまう、1年くらい実家の旅館「浅間温泉の「菊之湯」の手伝いをした

りしていました。

フルートを再開するきっかけを作ってくれたのは母親でした。旅館でロビーコンサートを企画し「知り合いのお客さんだけ招くから久々に吹いてみない?」と。そのコンサートで、それまで自分の中でモヤモヤしていたものが晴れ、求めていた響きまでもが「降ってきた」ような感覚を味わったんです。どん底を経験し、その反動で溜



実家は松本市にある浅間温泉の老舗旅館「菊之湯」。明治24年創業の古い建物でサロンコンサートを行う中條さんと尺八の渡辺淳氏。

——群響は歴史のある群馬音楽センターから、2019年にオープンした響きの良い高崎芸術劇場に移りましたが、新しいホールはいかがですか。

中條 いきなりとても響くホールに変わって、最初は戸惑いましたね。ドーンと吹いてしまうとパーンと鳴っちゃう。結構怖かったです。最初の頃は、オケの真ん中にある木管席から聴いているとヴァイオリンとヴィオラがずれるのが分かったりしました。今はホールに慣れましたから、そんなことはありませんけども。

前のホール（群馬音楽センター）でも音楽教室などで年に数回はまだ演奏しています。とにかく響かないホールですから、演奏するたびに「よくこいでやっつたね！」と（笑）。

でも、逆に鍛えられた部分はあるんですよ。響かないホールでは、ただ大きく吹くのではなく、音の幅を拡げるといふか、息の消費量を増やしながらも絶対に頑張っているって吹いてはいけない。頑張っている音が潰れます。群馬音楽センターは保存運動も起きているほど建築的には価値のあるものですが、僕も絶対に残して欲しいとは思っています。

ホールの残響の中で自分の音がどう響くか

——現在使っているらしいアルタスのモデルは？

中條 18KSという18金のモデルです。頭部管だけは大学に入った頃に購入した14金の頭部管のままで、ずっとかけがえのない相棒です。ただ、18金の楽器を吹きこな

メロディの上で鳥と一緒に
鳴っていたみたいなきこえさせたい。



趣味は自転車。ロードバイクで近くの榛名山に登ったりするという。

すまでには時間がかかりました。何が難しかったのですか。

中條 息がどんどん入り、どこまでも鳴っちゃうんじゃないかと思えてしまうのですが、そのままと音がフォークスされずにどんどん鳴っていつてしまう。最初は響きのポイントがなかなか見つけれず、吹くのを一度断念しました。でも限界値が見えないというのは、逆にこの楽器の良い部分でもあると思うんですよ。今も吹いていて、まだ限界まで行ってないんじゃないかと思ったりします。

——そうした楽器をオケで吹く時に意識されることは？

中條 響くホールでも響かないホールでも、残響の中でどう響くかということですが、

ね。芯の硬いツンツンしたような音ではなく、会場を包み込むような音で吹きたい。花形のメロディを奏でるような時でも、「耳を澄まして聴いたらメロディの上で鳥と一緒に啼いていた」みたいな感じに聞こえさせたい。聴いている人によく「音が上から降り注いでくるようだ」といわれますが、その言葉はやはり嬉しいですね。

そうした自分の音づくりの原点は、やはり田中社長との出会いにあったと思います。高校時代から、唇の力を抜いて、柔らかく吹くホロウトーン（Hollow Tone）を教わり、そこから音づくりのすべてが繋がっていった感じですよ。アルタスの楽器がそれと一体となり、一歩一歩成長して行っただけです。今使っているこの楽器だって、最初は何度か折ってやろうと思ったかも知れませんが、

（笑）。しかし、それがどんどん開花してくんです。

——一縷の望みを感じたからこそ？

中條 と言うよりも「鳴らしてみせよう！」と。幼い時に、鳴らない一升瓶を鳴らしたと思ったのと同じです（笑）。実はビール瓶より一升瓶を鳴らす方が大変なんです（笑）。それが鳴り始めると、今度は音色を変えたいと思ったりする。そうしたこだわりは小さい頃と変わっていません。

——今も山で吹いたりしますか？

中條 さすがに今はもう吹きません。実家に帰ったとき、鳥の声を聴きながら庭で吹いたりします。近くに山があるのはいいですね。群馬で良かった……群響にいて良かったと本当に思います。